

市民のためのワンプレートの窓口空間と、まち・歴史・風土と調和する重なる屋根の庁舎

- ・ワンプレート：1階に窓口執務室を集約したわかりやすい平面計画
- ・3つの重なる屋根：風景との調和、卓越風をつかみ取る環境シンボル

【基本構想・計画の課題】

市民サービス

- ・施設の老朽化・狭隘化
- ・市民のアプローチ性向上
- ・市民活動の場の創造

地域の活性化

- ・人口減少・高齢化に対応
- ・現庁舎・各支所の活用方法
- ・南薩地域の拠点づくり

災害対策

- ・建物の耐震安全性の確立
- ・地域防災拠点、災害対策本部の確立

財源・コスト削減

- ・合併推進債や各補助金活用
- ・環境配慮やライフサイクルコストへの配慮

【基本方針】

1 防災拠点

【計画のポイント】

「3つの防災力」による南薩の地域連携型防災拠点

2 すべての人にやさしい庁舎

誰もがわかりやすい、機能的なワンプレートの窓口空間

3 コンパクトな庁舎

財政負担の低減に貢献する規模の最適化と機能性の確保

4 環境にやさしい庁舎

南九州市の気候・風土を活かした持続可能な環境共生庁舎

5 まちづくり貢献市民の誇り

歴史・伝統や景観を大切に、市民とともにつくりあげる魅力発信拠点

設計チームの特徴・取り組み体制

人やまちの“想い”を“かたち”にするチーム編成と対話を重視した設計体制

“庁舎計画”と“まちの力”をつなぐ経験豊かな設計チーム

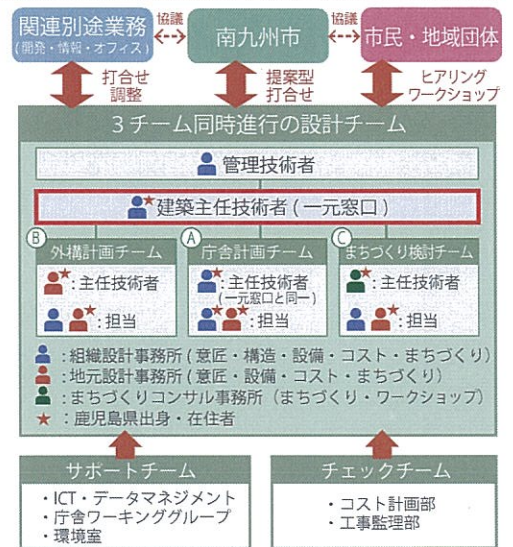
- ・多様な発想で提案し課題を解決する、設計力の高いスタッフ：管理技術者・各主任技術者は行政庁舎や危機管理庁舎（耐震Ⅰ類）、環境技術（ZEB補助金採択）の多くの実績を有し、市民・職員の共感を得られる高品質な庁舎設計を実現。
- ・川辺・頼娃・知覧をつなぎ、まちの魅力を引出す対話力：市民参画によるまちづくりの経験豊富な技術者を配置、市民の声を計画に反映。
- ・地元協働体制：南薩地域で庁舎設計の実績ある地元事務所スタッフと、組織設計事務所スタッフが同一プロジェクト室で机を並べて協働、意識と技術を共有してプロジェクトを円滑に遂行。

南九州市を知り尽くしたスタッフによる迅速かつ適切な対応

- ・鹿児島“愛”豊かなスタッフ構成：南九州市の地域性を熟知している地元事務所と鹿児島県出身・在住スタッフによる体制構築。

対話重視のコミュニケーションにより“想い”を確実に共有

- ・窓口の一元化による正確な情報共有：建築主任技術者（鹿児島出身）が市担当部署との窓口となり、プロジェクト全体の取りまとめを実施。
- ・同時並行による業務のスピード化：設計体制は①庁舎計画②外構計画③まちづくり検討の3チーム構成とし、効率的で円滑な業務遂行



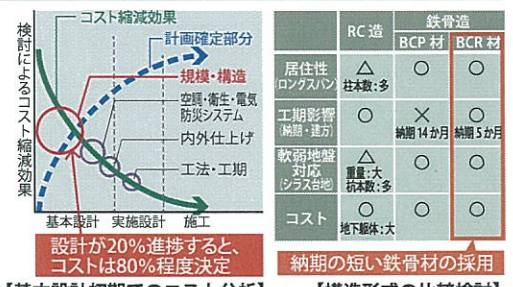
【業務の同時進行を可能にする設計チーム】

特に重視する設計上の配慮事項

人やまちが共感・納得できる庁舎づくりに向けた設計手法 ～3つの約束の実現～

約束1 プロジェクト初動の工事費概算から徹底したコスト管理

- ・設計のフロントローディングと重点項目の設定管理：基本設計初期の仕様決定を重視し、構造形式や設備方式など建設費の大半を占める項目を重点的に管理（コスト配分・コスト比較）、建設費上振れを抑制。
- ・市との目標価値の共有による的確な工事費削減メニューの提示：豊富な経験から蓄積された知見により無理のない範囲で面積削減。VE・CDメニューを並行検討し建設費を抑制。複数回のコストチェックにより、手戻発生防止。
- ・建設市場における物価動向の把握と建設コストへの影響予測：建設コストの変動を継続的に注視し、業務の節目となる段階で設計に反映。



【基本設計初期でのコスト分析】

【構造形式の比較検討】

約束2 合併推進債期限を厳守

- ・マイルストーンを設定した確実な工程管理：設計開始前に必要な与条件を設定した工程表を関係者で共有し、手戻りなく確実に短期間で業務を遂行。
- ・効率的な意思決定：ヒアリングシートや与条件リスト、模型やパース、3次元モデル、その場のスケッチによる打合等により関係者にわかりやすい資料を提供し、迅速で機動力のある意思決定を促進。
- ・関連別途業務との調整（開発、情報通信、オフィス環境整備等）：別途業務との調整に設計事務所が主体的に協力し、定例会議化による他業務との整合を行い、一体感をもって良い庁舎計画を追求。



【基本設計スケジュール】

約束3 庁舎づくりから“南九州市の未来像”を見据えたワークショップ

- ・“想い”を“かたち”へ実現：複数回のワークショップを通して市民の声を庁舎計画に反映、利用者に永く愛される施設づくりを実施。
- ・川辺・頼娃・知覧を繋ぐ拠点：新庁舎だけでなく、川辺・頼娃・知覧の既存庁舎活用方法も考え、市全体の公共施設のあり方について検討。



【ワークショップのイメージ】

【わかりやすい資料イメージ】

平常時の「わかりやすさ」と、災害時の地域防災拠点を両立するワンプレート庁舎 ～「オモテ」と「ナカエ」に倣った平面構成～

計画のポイント

基本方針①

地域連携に加え、地盤や環境等の地域特性を活かし「3つの防災力」を備えた安心・安全で強靱な拠点づくり

・周辺公共施設と連携し、南薩地域の広域防災拠点を構築します。

④中長期の機能継続

⑤高い耐震性能

⑥速やかな施設転用

により「強靱な庁舎」

を目指します。

基本方針②

オモテ・ナカエ・エンガワにより構成された、ワンプレートの窓口空間

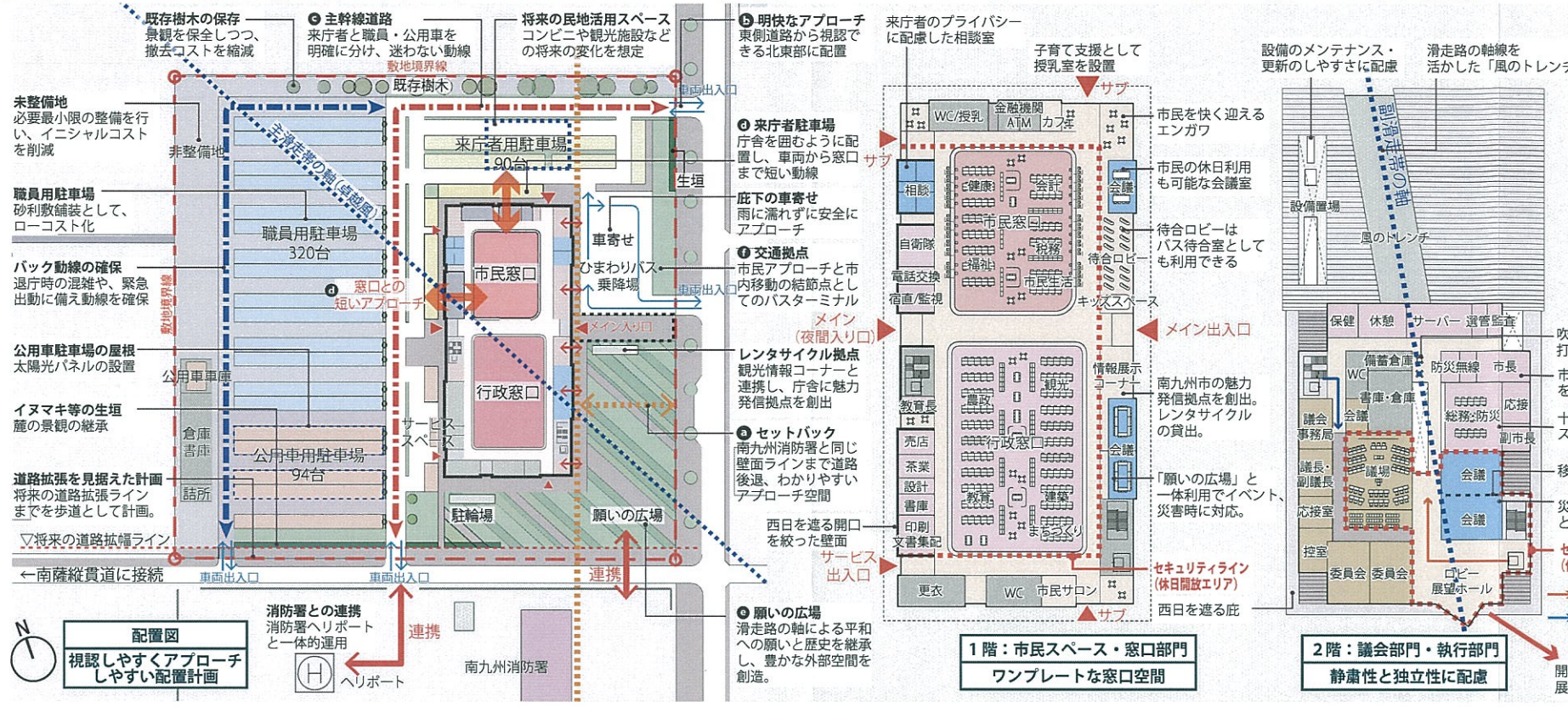
・麓集落の伝統的な民家に見られるオモテ・ナカエの明快なゾーニングやエンガワの構成を庁舎に活用します。

●オモテ：窓口空間

（全て1階に集約配置したワンプレート空間）

●ナカエ：各諸室

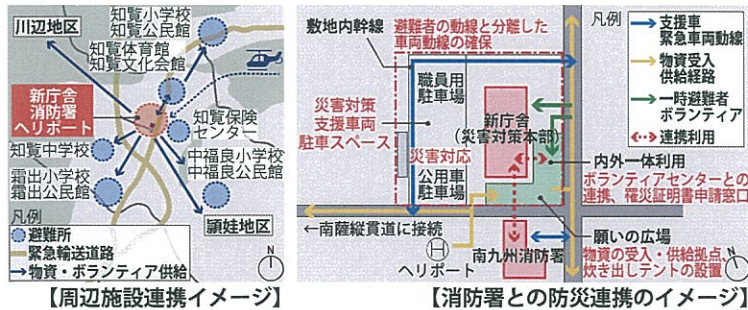
●エンガワ：待合ロビー・市民空間



基本方針① 市域の防災力を高め、広域連携に寄与する防災拠点

機能の補完・連携による拠点機能の強化と広域化

- ・川辺・頤娃・知覧3地区施設との拠点ネットワークを形成：新庁舎を中心に隣接する学校や知覧体育館等、周辺施設の持つ機能を補完・連携させ、地域一体での防災強化を実現。
- ・南九州消防署との一体運営により救護・救援機能を支援：南九州消防署ヘリポートと連携し、救護者搬送・物資の運搬、新庁舎の防災拠点・災害対策本部機能をサポート。



防災拠点として機能するための「3つの防災力」

④被災後中長期の防災拠点機能継続を確保する設備計画

- ・多重化したインフラバックアップを整備：中長期にわたる必要機能を予め想定し、防災拠点として災害発生時の初動期から3か月程度の長期にわたる業務継続を実現。
- ・自然エネルギーの活用：自然採光・自然通風を積極的に導入、インフラ途絶時においても居住性を確保できるパッシブな庁舎計画を実現。

平常時	災害発生 インフラ断絶				
	初動期 1日目	展開期 2日目	安定期 3日目	復旧期 4日～1週間程度	復旧期 1～2週間程度
電源	非常用発電機(3日分)・太陽光発電	電源復旧			
通信	衛星通信にて対応	通信復旧			
飲用水	受水槽・備蓄水・雨水ろ過	給水車対応		復旧	
雑用水	雨水貯留・井水にて確保	給水車対応		復旧	
排水	仮設トイレ・非常用排水槽(7日分)	搬出車対応		復旧	
備蓄	災害対応に従事する職員の食料(7日分)	復旧			
ガス	備蓄LPGによる空調(3日分)	補給			

【インフラバックアップのイメージ】

⑤高い耐震性と経済性を実現する構造計画

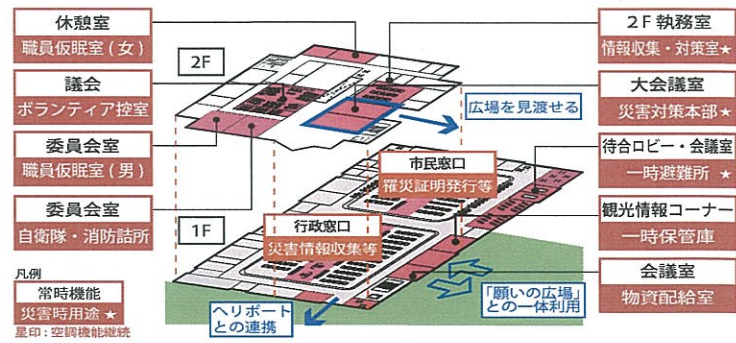
- ・シラス台地に適合したフローティング基礎：基礎構造は排出土量と建物重量がバランスするフローティング基礎（沈下抑制杭併用）を採用。
- ・鉄骨と木のハイブリッド構造による建設コスト・工期の圧縮：設計期間や建設コスト、費用対効果を踏まえたうえで、震度6強にも耐えうる耐震構造（I類）を実現。主体構造は軽量かつ耐震性に優れた鉄骨造を採用し、平屋とした市民窓口部の屋根には温もりのある木造を採用。

基礎形式	基礎構造	杭基礎
概念図	新庁舎	新庁舎
特徴	・排土重量・建物重量・摩擦杭で沈下抑制 ・杭長：短い ・杭本数：やや少ない	・高支持力タイプ杭 ・杭長：長い ・杭本数：最も多い（複数杭/柱） ・杭長：短い
耐震性	底版との摩擦で全て負担	地震力は杭で全て負担
設計用支持力	・長期：地盤許容支持力 ・支持力※：大※杭1本あたり	・長期：杭許容支持力 ・支持力※：小※杭1本あたり
工期	0.85	1.00
基礎コスト	0.90	1.00

【シラス台地に適した基礎構造の比較表】 【ハイブリッド構造イメージ】

⑥速やかな施設転用が可能なフェーズフリー庁舎

- ・災害時の防災拠点機能を予め設定：平常時の庁舎機能とあわせて防災拠点・災害対策本部としての利用想定や機能を予め計画に反映、災害時の素早い初動に対応。



【フェーズフリー庁舎 施設転用のイメージ】

基本方針②

人と車の動線、来庁者と職員のゾーンが明確に区分された市民に優しい配置計画

視認しやすくアプローチしやすい庁舎の中央南北軸配置

- ① 前面道路からのセットバック：道路に沿って車寄せ・緑地空間「願いの広場」を設け、歴史・風景を感じる市民広場を創出。
- ② 視認性の良い来庁者車両アプローチ：東側道路から視認できる北東部にわかりやすい車両の出入口を配置。
- ③ 安全を確保する敷地内の主幹線道路：敷地内主幹線道路を計画し、それに接する形で来庁車・公用車・職員用駐車場をゾーニング。
- ④ 市民窓口に近い来庁者駐車場：敷地内の主幹線道路を横断せずに短距離で庁舎へアプローチできる安全な計画

周辺のまちづくりや将来を見据えた市民のための外部空間

- ⑤ 歴史の継承と地域の新しい交流の場となる「願いの広場」：南東部に知覧飛行場の歴史継承と平和への願いを込めた市民広場を配置。祭やマルシェ等が開催される豊かな外部空間を創造。
- ⑥ ひまわりバスのターミナル拠点：霜出げんき館のターミナル機能を庁舎に移設。建物内でのバス待合も可能。南九州市全域の市民アプローチと、市内移動の結節点機能を併設し、交流を促進。

基本方針③

1階に集約した「わかりやすい」「迷わない」ワンプレートの窓口空間

- ・1階に集約配置：整形で見通しの良いワンプレートに、来庁者の多い窓口・執務空間を配置し、市民へのわかりやすさを重視。
- ・窓口のフレキシビリティ：将来のデジタル化や人口の変化を見据えて、窓口・執務空間回りのレイアウト変更や改修の容易性を確保。
- ・市民をこころよく迎えるエンガワ：外周部には市民利用が可能な会議室や市民ロビーを配置、屋内外の一体的利用が可能。

基本方針④

誰もが安心して利用できる庁舎計画、バリアフリーやユニバーサルデザインの考え方

- ・サイン計画：あらゆる世代や外国人、観光旅行者にも配慮し、デジタルサインや、タブレットによる来庁案内を実施。
- ・ユニバーサルデザイン・バリアフリー：すべての来庁者（車いす・高齢者・お子様連れ、外国人など）や、職員の安全・安心利用を追求。
- ・超高齢化社会を見据えた施設計画：来庁頻度の高い窓口部門を1階集約化、窓口の照度確保、段差や廊下のゆとりを配慮。
- ・子育て世代を応援：キッズコーナーや授乳室を子育て関連窓口に近接して配置、職員の目の届く位置として来庁者の安心・安全を確保。

配置案	中央配置（南北軸）	北側配置（南北軸）	中央配置（東西軸）
① 広場	△ L字型に広く確保	△ 分断される	△ 庁舎との接点小
② 駐車場視認性	○ 視認しやすい	○ 視認しやすい	△ 奥まっている
③ 敷地内道路	△ 各駐車場にアクセス可	△ 職員駐車場が止	△ 各駐車場にアクセス可
④ 駐車場と窓口の近接	○ 窓口近接	△ 敷地内道路で分断	○ 窓口近接

【新庁舎配置の比較検討】



【雨に濡れない底下アプローチのイメージ】

【広場の市民開放】



【駐車場から窓口までの短いアプローチイメージ】

【キッズコーナーやLGBT配慮トイレのイメージ】

南九州市の気候・風土を活かし、経済性に優れた環境共生庁舎 ～「土地の記憶」から学び卓越風を活かした環境技術の提案～

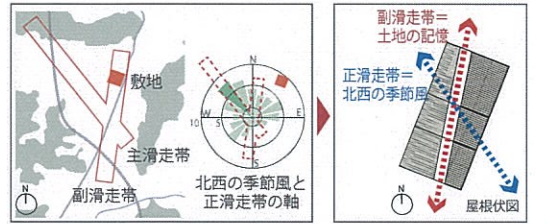
計画のポイント

基本方針③ 財政負担の低減に貢献する規模の最適化と機能性の確保

- 規模の最適化をはじめ、様々な観点からの検討により、将来にわたって財政負担を低減するコンパクト庁舎を目標とします。
- 市民サービス、窓口業務、職員の働き方など将来の在り方を徹底議論し、未来につなげる庁舎の在り方を追求します。

基本方針④ 重なる屋根により、気候・風土を活かした持続可能な環境共生庁舎

- 四季を通して温暖で豊かな自然に恵まれた気候、「土地の記憶」知覧飛行場滑走帯から読み取れる卓越風、茶葉の栽培に適した朝晩の大きな気温差、これらを読み解き自然エネルギーを積極的に活かします。



基本方針③ 機能性と経済性を両立するコンパクトな庁舎

建築計画の合理化の手法

- A低層化**：基礎、構造躯体、階層や平面計画の有効率等を比較し、最も低コストとなる2階建てを採用。
- Bコンパクト化**：合理的でかつ無理のない計画により、庁舎面積約 6,600 m²のコンパクトな庁舎を実現。（基本計画時の庁舎面積：7,000～7,500 m²程度）

執務室	ペーパーレス化やノート PC の普及によるコンパクト家具の採用	執務室面積 約 15%削減
会議室	利用実態調査による規模・室数最適化、予約システム導入、移動間仕切の採用	会議室面積 約 10%削減
書庫・倉庫	文書量調査による削減計画（ファイリングルール策定支援）の作成。既存支所庁舎の空スペース活用し、長期保管文書を保存	書庫・倉庫面積 約 20%削減
共用部	低層化、ワンプレート化による階数・廊下・EV・水回り等の面積の削減	共用部面積 約 5%削減

【面積削減の手法とその効果】

従来の執務机 机奥行：700
これからの執務机 机奥行：600

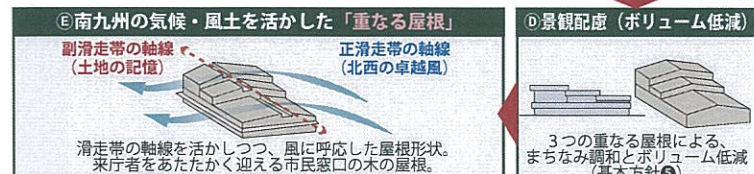
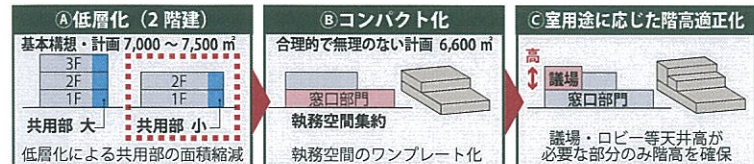


【コンパクト家具のイメージ】

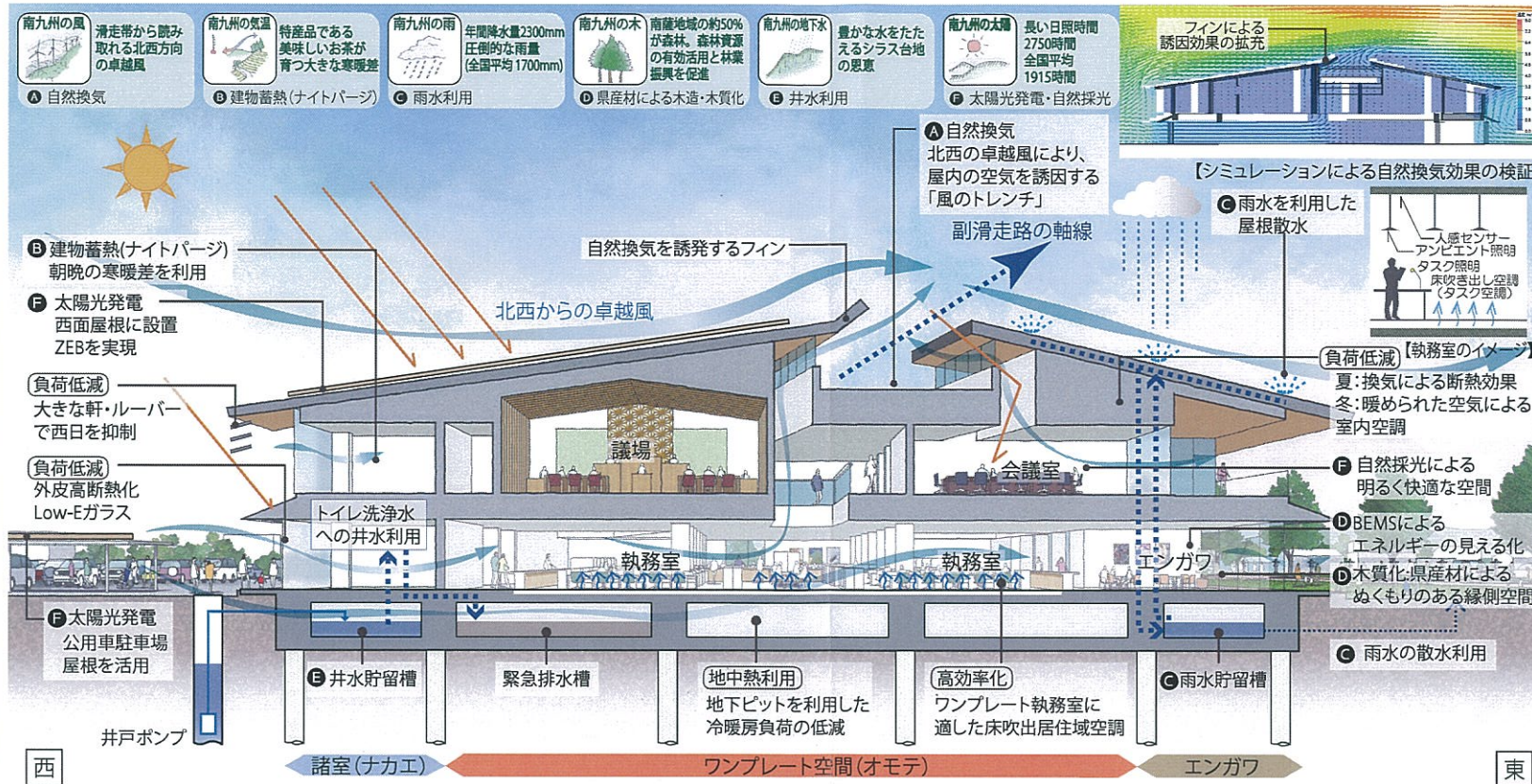


【ファイリングルールによる収納例】

- Cボリュームの最適化**：内部の必要機能に応じて階層・階高を設定した建物ボリュームとし、周辺景観との調和や気候の活用を促進する屋根形状とします。



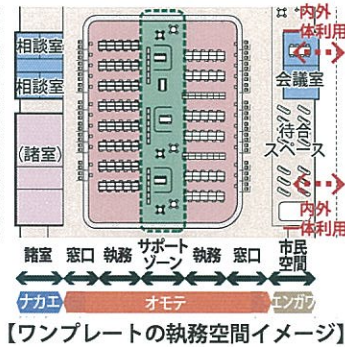
【建築計画の合理化のイメージ】



基本方針③ 職員が働きやすくフレキシブルな執務空間

明快なゾーニングと効率的な執務空間

- 可変性の高い執務室**：整形で広いワンプレート空間に執務室を集約配置し、部門間連携が容易でかつ組織改編等にも柔軟に対応できる計画。
- 効率性を高める明快なゾーニング**：窓口、執務、サポートゾーンを明快に区分し、業務効率向上を図る。
- 様々なコミュニケーションの場の創出**：エンガワ空間やサポートゾーンにも打合コーナーを点在させ、多様な相談業務やミーティングが可能となる計画。



【ワンプレートの執務空間イメージ】

基本方針③ デジタル化推進に柔軟に対応する計画

将来における窓口の在り方の変化

- 紙ベースの申請が主流
- 手続きごとに窓口が異なる
- 記載スペースや広い待合スペースが必要
- 書類確認や端末入力等を行うバックオフィスが必要

- 情報システムの標準化：端末スペース削減
- 行政窓口のオンライン化：待合スペース削減
- 在宅勤務：バックオフィス削減

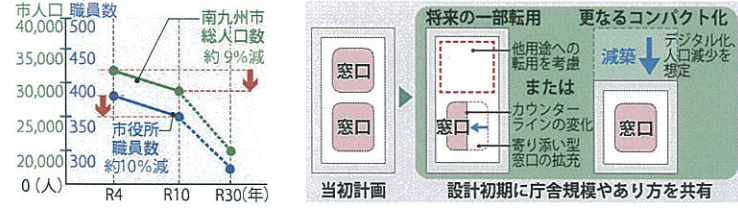


【従来の窓口から寄り添い型窓口への移行イメージ】

基本方針③ 未来を先読みした庁舎の規模と機能の検討

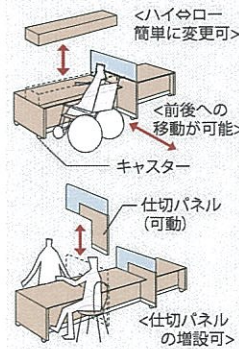
デジタル化や人口減少を考慮した庁舎の規模・機能設定

- 将来の一部機能転用**：執務空間が縮小した場合、空いたスペースに市民活動室の拡充や民間活用（金融機関支店誘致）等市民サービスを豊かにする機能導入の可能性を予め検討。
- 設計初期に庁舎規模の再協議**：30年後には人口2万人を下回ると予想される*なかで、人口減少の動向とデジタル化推進の目標を考慮し、将来にわたって南九州市に最適な庁舎規模や在り方を共に検討。※平成28年1月 南九州市人口ビジョン



デジタル化による変化への備え

- 可動式窓口カウンター**：高さ変更や位置移動を容易とし、使い方に応じた柔軟な変更対応。
- ノンテリトリアルオフィス**：1階窓口・執務空間はOAフロア・フリーアドレスとすることで、自由な家具レイアウトを許容し働く場を選択できる計画。
- リモートワークへの対応**：川辺・穎娃各支所をサテライトオフィス化し、新庁舎とのWEB会議やデータアクセスを可能とするネットワークを構築。



【フレキシブルな窓口カウンターのイメージ】



【自由に選べる多様な働く場のイメージ】

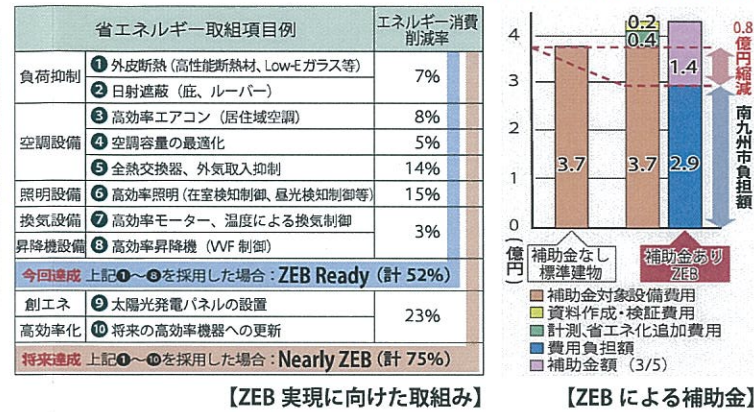
基本方針④ ライフサイクルコスト低減と ZEB に繋がる取り組み

省エネ・カーボンニュートラルを実現する設備システム

- 電気とLPGのベストミックス空調**：電気式の高効率空調機器を主体とし、LPG式空調機器を導入する事で、南九州市の地域活性化を図りつつ、低炭素空調システムを構築。

ZEB 庁舎へのロードマップ

- 竣工時 ZEB Ready の達成** →エネルギー 52%削減
- 将来の Nearly ZEB**：新たな地域エネルギー（太陽光増設）の活用、更新時の高効率機器導入 →エネルギー 75%削減
- ZEB 事業の確実な補助金採択**：ZEB 実現とともに補助金「建築物等の脱炭素化・レジリエンス強化促進事業」を取得、財源確保に貢献 →事業費約 0.8 億円の削減効果



【ZEB 実現に向けた取組み】 【ZEB による補助金】

基本方針④ 品質確保と長寿命を両立し、維持管理を低減する庁舎

イニシャルコスト削減 →約 5%削減

- 建設費の低減が本事業の重要課題

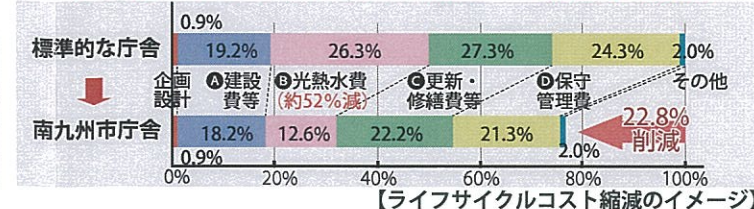
取組み	コストマネジメント	補助金の活用
④建設費等	・初期の最適なコスト配分・分析、建設資材の物価変動予測 ・主要躯体・外装材・大型設備機械等の比較検討	・ZEBや木材利用による各種補助金の取得検討
④建設費等	・低層化（2階）による共用部（EV、階段、廊下、トイレ等）の面積削減 ・執務室の効率化 ・DX・ICTによる会議室予約システム、文書量低減等の面積削減を検討	・造成計画の工夫による盛土を最小限（掘削搬出土活用、購入土低減） ・整備範囲の縮小化（樹木帯など現状のまま活用） ・簡易舗装化（職員駐車場の砕石舗装等） ・既存擁壁活用、敷地周囲フェンス再利用など既存活用
④建設費等	・フロアリング基礎による下部構造の合理化 ・将来のコスト予測と資材調達価格の優位性を確認し、適切な種別を選定	・規格品や工場製作のユニット化による、労務不足による工期遅延回避 ・シンプルな設備システムや汎用機材の採用、維持管理費低減

ランニングコスト削減 →約 28%削減

- 将来にわたって市民に負担を掛けない手法

取組み	建物の環境負荷低減	消費エネルギーの効率化	建物の維持管理の容易化	建物の長寿命化	データ活用・利用者の意識啓発
④建設費等	・建物外皮への負荷低減、自然エネルギーの活用で空調・照明の消費エネルギーを抑制	・日々の建物を利用する上で必要な設備は、効率的な運用を行うことで、光熱費を削減	・建物の性能・美観を維持するためのメンテナンスを容易にすることでコストを削減	・社会情勢や市民・職員の変化に対応できる可変性・柔軟性を確保	・建物の消費エネルギーのデータを分析・改善でエネルギーの低減化 ・データの公表や環境技術の見え方、省エネ意識の向上に貢献
④建設費等	・パッシブな環境配慮 ・建物の高断熱化	・空調システム ・照明システム	・個別制御空調、タスク&アンビエント方式、全熱交換器 ・人感センサー、LED照明、太陽光発電、蓄電、タスク&アンビエント方式	・フレキシブルな執務空間 ・将来変化を見据えた建築計画	・BEMS※の利用 ・職員、住民への省エネ啓蒙 ・バイオマス等、環境技術体験ツアー ※ビルエネルギー管理システム

トータルライフサイクルコスト削減 →約 22.8%削減



歴史・伝統や景観を大切にし、市民とともにつくりあげる魅力発信拠点 ～市民の声や風景と調和する重なる屋根～

計画のポイント

基本方針⑤
“みな、みりよく！” 自然・歴史・風土・伝統を大切に
した魅力拠点の創造

- ・行政手続きのための庁舎から、集い・愛され・活用される、市民とともに創る魅力いっぱいの庁舎とします。
- 気軽に立ち寄れる「エンガワ」：人々が集う市民空間
- 3つの重なる屋根の低層庁舎：木佐貫原の風景に溶け込み、ヒューマンスケールを大切にしたいボリューム
- 伝統技術の継承の場となる庁舎：人材育成と地域産業の発展に貢献

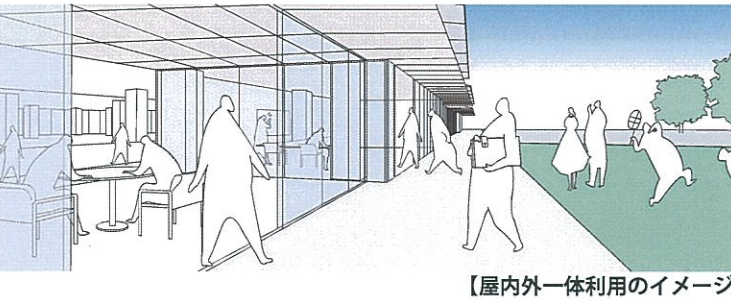
自由提案
庁舎づくりから、創造と活力に満ちたまちづくりへ

- ・2つのワークショップにより、市民に愛される庁舎づくりの気運を醸成し、川辺・頼娃・知覧を一体的に見据えた将来の南九州市の住みよいまちづくりの姿を創出します
- ワークショップ1：「庁舎づくりに関わる」市民とともに魅力いっぱいの庁舎を創りあげるプロセス
- ワークショップ2：「南九州市の将来を語る」川辺・頼娃・知覧現庁舎の活用方法の検討を通じ、市の将来像を育むプロセス

基本方針⑥
市民が気軽に立ち寄れる、新しい市民の居場所

居心地が良く、自然に集う市民のエンガワ空間

- ・市民に広く開放したエンガワ：待合スペースは知覧茶等を気軽に楽しめる「市民の居場所」として広く市民に開放。「願いの広場」と連続し一体的利用も可能な計画。
- ・休日の単独利用も可能な会議室：会議室は庁内利用だけでなく、市民活動や確定申告・期日前投票会場として活用。

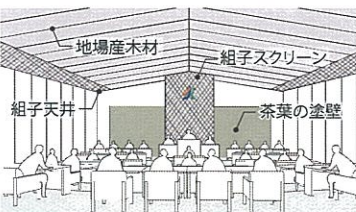


人とまちをつなげる観光拠点

- ・情報展示コーナー：エントランス付近に、旧3町の歴史・産業・観光やまちの未来の姿等を紹介する情報展示コーナーを配置。既存庁舎や周辺観光施設と連携を取りながら、まち巡りを中継する拠点。
- ・まちの魅力を発信：祭り（祇園祭、ゴッソイ祭り、知覧ねぶた等）や伝統技術（川辺仏壇、知覧傘提灯等）、地場産商品（茶、養鶏等）を紹介。ブランディングを高める空間づくり。

歴史と伝統を継承し、次世代へつなぐ議場

- ・木のぬくもりと伝統技術を感じる議場：地場産木材や伝統技術を用いた内装とし、明るく開かれた議場のデザイン。
- ・フラット化による多目的利用：休日利用も可能なセキュリティ計画とし、フラットな床と可動家具等により議場の多目的利用に対応できる計画を検討。
- ・開間岳を望む展望ロビー：2階議場の傍聴席付近に開間岳を望む展望ロビーを計画。



基本方針⑦
緑豊かな南薩の風景と調和する「重なる屋根」

圧迫感を軽減する分節屋根

- ・周辺景観に配慮：建物は周辺の街並みや山並みに溶け込む低層の分節屋根の庁舎として計画。
- ・建物のセットバックと広場の計画：建物による圧迫感の低減を考慮して、前面道路沿に「願いの広場」を計画。
- ・景観計画の先駆け：重なり合う屋根のデザインや落ち着きのある色調とすることにより、市が策定する景観計画のモデルケースとして相応しい庁舎。

木佐貫原のおおらかな風景を大切にしたい外部空間

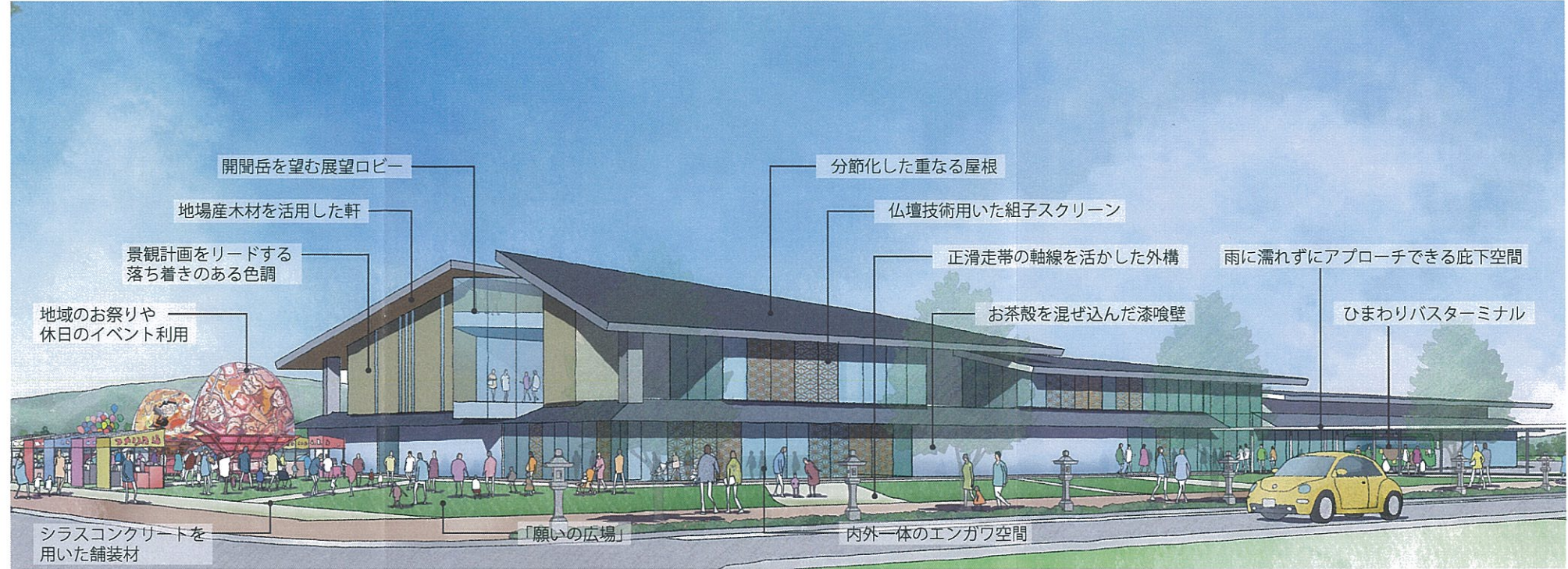
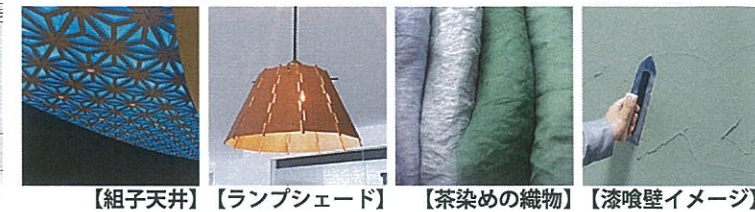
- ・緑豊かな外構計画：北側既存樹木の存置やイヌマキ等の植栽、芝生、緑化ブロック等で、緑豊かな外部空間を計画。



基本方針⑧
南九州市の魅力が詰まった、市民に愛される庁舎

特産・伝統・技術を活かした空間づくり

- ・基幹産業・伝統地場産業からの創造と継承の「場」の提供：南九州市の伝統・技術の創造性を新庁舎設計に取り込み、伝統の継承と若手技術者・後継者への育成の場を創出。
- ・茶の香り立つ庁舎：エントランスやエンガワ、議場などの一部の内装材に知覧・頼娃のお茶の葉を利用した建材やお茶の葉を練り込んだ漆喰壁、茶染めによる暖簾を用いたサイン等を使用。漆喰壁や茶染め暖簾は工事中に市民ワークショップにより作成・施工することも検討。
- ・次世代の職人に引き継がれる仏壇技術活用機会提供：組子技術を生かした格子スクリーンや彫金技術を使ったランプシェード、格子天井、拭き漆による家具等の内装空間を提案。
- ・地場産木材の活用：市民の手が触れる内装や家具には地場産木材を利用。



自由提案：ワークショップ1「庁舎づくりに関わる」
市民とともに新庁舎を創りあげるプロセスのデザイン

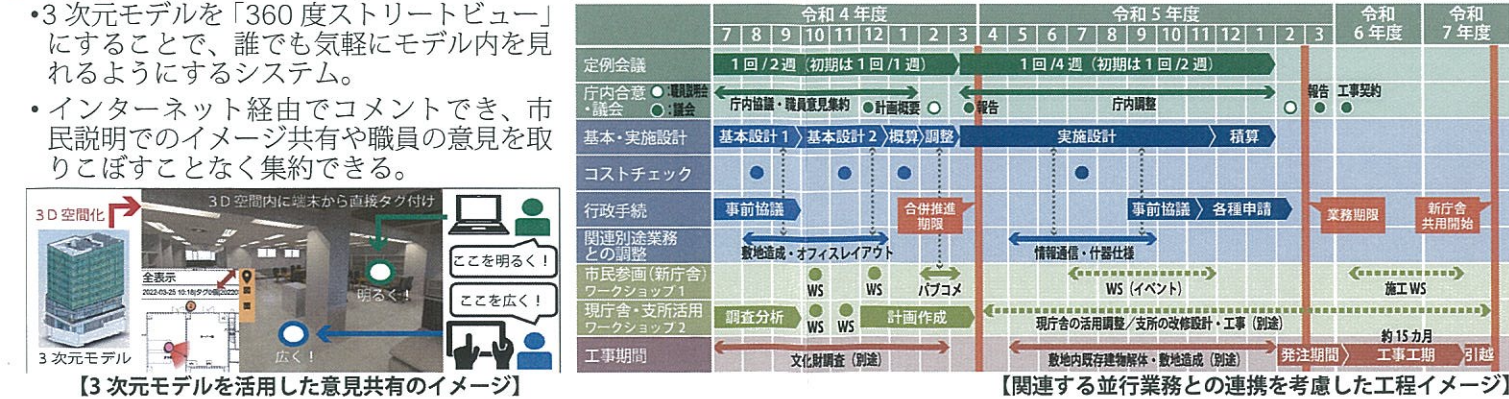
庁舎建設の一連の流れを踏まえたワークショップ（WS）

- ・市民がより深くプロセスに関与：基本構想 WS では庁舎建設をきっかけとした市のまちづくりについて市民との語合いを実施。基本設計段階では、配置・空間やスペース・広場の使い方を考える WS を実施し、成果を設計に反映。
- ・庁舎と一緒に作る参加型企画：実施設計段階では、川辺仏壇等の地場産業の職人と連携して庁舎の材料づくり WS を実施し、新庁舎への愛着や市民の利用意識・機運を醸成。
- ・ニュースの発信：WS等の結果は、基本構想時と同様にニュースとしてまとめ、市ホームページ等で取組状況を発信。



自由提案
3次元モデリング（BIM）活用による設計プロセスの“わかりやすさ”を活かした業務の並行推進

- 3次元モデルを活用した、いつでも誰でも確認・コメントできるコミュニケーションツール
- 全ての並行業務の把握・連携と手戻りのない計画反映
- ・ワークショップや関連別途業務、議会対応など、様々な関連項目を一元管理・把握して連携を図り、手戻りなく確実な計画反映を実施



自由提案：ワークショップ2「南九州市の将来を語る」
新庁舎建設と連動した現庁舎・支所の活用方法の検討

現庁舎・支所の施設・敷地の活用計画の作成

- ・事業実施につながる活用計画：新庁舎の設計と並行し、現庁舎・支所の活用方法を継続して調査、検討。現庁舎・支所ごとの活用パターンや改修等の対応策、事業費等を計画としてまとめ、次年度以降の事業実施への移行準備。
- ・現庁舎・支所活用の市民意向把握：3地域（川辺・頼娃・知覧）それぞれで WS を実施。基本構想時 WS で出合った使いアイデアを掘り下げ、必要な機能、活用方策を具体的に語り合う内容とし、結果を活用計画に反映。WSニュースでも発信。

